AACK 京都大学学士山岳会 No.103

Newsletter

December 2022

http://www.aack.info

目　次

カンペンチン峰初登頂 40 周年特集（その 2）
カンペンチン隊に加わることになった経緯
陳　介臣 1
色褪せた記憶の中の蘭塔山―カンペンチン初登頂前史
牛田一成 2
カンペンチン初登頂から雪氷生物学研究へ
幸島司郎 11
されど 40 年　中川　潔 15
偵察隊　横山宏太郎.....17
図書紹介
『今西錦司と自然』
斎藤清明著　横山宏太郎.....20
第 54 回雲南懇話会（京都フォーラム）講演概要（その 3）
山岸久雄.....22
会員動向 24
事務局だより 24
編集後記 24

カンペンチン峰初登頂 40 周年特集（その 2）

カンペンチン隊に加わることになった経緯

通訳・気象担当　陳　介臣

カンペンチンは 40 周年、筆者は満 80 才、で丁度人生の中間点に当たります。それまでの 40 年は、誕生・就学・就職・結婚・親へなど、生活環境や人生観が結構激しく変動した時期でした。後の 40 年は、基本的には同じ生活環境（職場・家庭）で、考え方の変動も少なくなりました。カンペンチン隊参加は筆者人生の中間点であり、変曲点にも当たる時期のイベントだったことになります。

登山に縁のなかった筆者が、カンペンチン隊になぜ参加することになったのか、原稿依頼のあったこの機に、その経緯について記しておきたいと思います。

伏線になっているのが、筆者の出自とそれにまつわる言語生活や専攻分野にあると思われますので、そのことから書き始めます。父母は日本割譲下の台湾から神戸に移住して貿易業に従事していたのですが、筆者はその 7 男 3 女の末っ子として終戦 3 年前に神戸で誕生しました。誕生時は形式上日本籍だったのが、終戦で台湾の中国への返還に伴い、自動的に中国籍になりました。本人の意思に関わらず、日本社会の「少数派」に属する状況になっていました。

幼年期の言語生活は、台湾語（家庭内で主に父母との会話）と日本語（兄弟姉妹や家庭外での会話）の混在でした。小・中学は中華学校に進学したので、北京語（主に学校内）が加わりました。使用頻度に差があったので、結局日本語がマザータングになり、北京語は中学程度の会話、台湾語はまれに家庭会話ができるという状態でした。それほど苦労せずに覚えた北京語が、後に隊に加わる伏線になっていたとは、当時は知る由もありませんでした。

成長するにつれて「少数派」としての自覚が

芽生え、少数派として生きていく覚悟も備わるようになりました。日本では少数派（外国人）不採用や幹部不登用傾向が強かった時代だったので、母国に帰ることを漠然と視野に入れるようになっていました。それなら理系専攻だと考え、部活で培ったタフさが活かせると（誤解）して、大学では自然相手で体力が要りそうな理系の気象学を専攻しました。

当時は日中の国交が断絶中で、今と違って中国からの留学生も皆無に近く、手軽な通訳人材が手薄な状態でした。時折中国から学術代表団の訪日があると、筆者などにも声がかかることがあり、喜んで手伝っていました。この「気象専攻で曲がりなりにも通訳ができる」というのが、明確な伏線になったものと思われます。

その後、諸事情により帰国は叶わなかったのですが、指導教授の紹介で専攻分野が活かせる日本気象協会（関西）に就職することができました。思い描いてきた生活とは異なり、卒業・帰国断念・就職、続いて結婚・二児誕生と生活環境は急変しました。そのうちには慣れてきて多少マンネリ化が進み、日頃の最大関心事は仕事上の課題を如何に解決するかということに移っていました。ちなみに、登攀隊長の森本陸世君（グロン）がこの時期には同じ気象協会（東京）に在籍していたのですが、カンペンチンを契機に多方面にわたり濃厚に交流する同僚になるとは夢にも思い及びませんでした。

そんな折に、隊に加わる直接のきっかけとなったのは、伏線となる筆者の背景をよく知る中島暢太郎先生（元京大山岳部長･気象学教授）からの打診でした。未知への興味やマンネリ打破への願望が皆無だったわけでも無かったし、日中交流に多少貢献できるのではという思いもあったとはいえ、登山経験もなく迷惑をかけるのではないかと逡巡していたところ、先生の口添えもあって職場から快諾が得られたことで、踏ん切りがつきました。余談ですが、この件に関する職場の対応には、少数派排除志向が微塵も感じられなかったので、非常に嬉しく感激したのを覚えています。

このような経緯で、結局遠征に連れて行ってもらいました。紆余曲折があったなか、登山隊員の大奮闘で所期の成果をあげていくのを身近に見届けることができたのは誠に好運でした。今でも遠征隊の諸活動は無論のこと、中国辺境の状況やチベット族の風習など筆者にとって新鮮だった数々の光景が懐かしく思い出されます。筆者にとっては人生のアクセントをなすイベントになりました。おまけに、遠征を通じて学んだ、「周到な準備」、「臨機応変な対応」、「異質の受容」などの重要な教訓が、人生後半に起こった、自宅地震被災･単身赴任･孫誕生･退職･年金生活などへの対応に間違いなく役立ちました。遠征隊への貢献度は疑問の多いところですが、個人にとっては実にありがたいことでした。

色褪せた記憶の中の蘭塔山―カンペンチン初登頂前史

牛田一成

平井ポコさんの訃報に接したときに、ランタン・リからカンペンチンへの転進のいきさつを思い出さざるを得なかった。「おまえたちは、勉強不足だ」と叱責をうけつつ、ほんとうに恥ずかしながら神戸大の目標の一つであったカンペンチンを譲って頂く格好になってしまった。この稿は、平井ポコさんの姿を思い出しながら、この時のいきさつを書いてみる。書いているうちに旅行記のようになってしまったが、追想ということでお許し頂きたい。カンペンチンの関係者では、ポコさんの逝去以前にも、近藤隊長、森本グロン登攀隊長、人見ハイガ隊員、近藤クリマン隊員が鬼籍にはいっている。いまでも現役で働き続けられている幸運をかみしめながら書いていることも書き留めておきたい。（追記：ウガンダ滞在中に思いもかけず今井一郎の訃報に接した。かれが若い頃ナイロビで車にはねられて、当時学振でナイロビ在住だった山極寿一さん、指導教官だった田中二郎さん、山岳部で対応していた松沢哲郎さんの姿を思いだしてしまった。かれが５年前にカンパラのアパートまで尋ねてきてくれたことが昨日のことようにも思える。思いが残っているのか、それとも本望だったのか。彼の冥福を祈りたい。）

さて、当時をあらためて思い出してみると、

もともと、AACK はネパールヒマラヤのランタン谷の奥にあるランタン・リの登山を目指しており、1977 年のポストモンスーンには、横山コータロー、今井ゴミカン、佐治オタマの偵察隊をだしていたりもした。一方で、AACK は、永らくチベットでの登山を目指しており、私の記憶では、その目標はグルラマンダータ（ニャモナニール）だった。当時、情報としては長谷川伝次郎氏の紀行文に掲載されているモノクロ写真のなかにその姿があるだけの山だったと記憶している。日本山岳会にチョモランマの登山を解禁したばかりの中国登山協会と交渉をするものの、当面無理と判断し、そのときは未踏峰であったランタン・リのチベット側からの登頂を目指す計画に切り替わった。このあたりの紆余曲折ぶりは、時報 9 号掲載の西山さんや横山さんの原稿に詳しい。AACK は、代理人的な人物を介さずに会員が直接中国登山協会と交渉していたが、日本の登山団体の交渉を行っていた複数の日本人が中国登山協会の周辺にいた。国交正常化して 10 年たたない間は、いろいろ特殊な利権や人間関係を持つ人物が介在することが普通だったのだろう。81 年の蘭塔山（ランタン・リ）偵察の折に、北京の薄暗いホテルで、彼や彼らに引き合わされたりもしたが、彼らの語る「激動の中国と自分史」はなんだかとっても浮き世離れして聞こえたこともよく覚えている。

登山計画の開始

1981 年にランタン・リのチベット側からの登山許可が中国登山協会から出されたことで、計画が実際に動き始めた。当時の AACK 大学院生の中では、これとは独立してミャンマー国境沿いのカワガルポの資料を集めていたりもしていたが、アメリカ人の書いた文献しかなくて、まさかこれがあの梅里雪山だとは、その時は夢にも思っていなかったし、最初のころは、自分の中でカカルポラジとの混同もあったくらいだ。こちらの方は学術調査寄りの内容で相手は中国科学院だったが、話自体が突然立ち消えてしまったうえに 1980 年の大晦日に中心人物であった竹村アオカンが赤谷尾根で遭難死したこともあって、否応なしにランタン・リに集中することになった。

百万遍の第一勧業銀行に京都大学蘭塔山学術登山隊の名義で口座を開設し、資金調達が始まった。1981 年 10 月には、横山コータロー偵察隊長のもとで中川コタレと 3 名で、ランタン・リ偵察を目的としてダジ氷河に入った。自分にとっては初めての海外渡航で、国際線に乗るのも初めてだったので、記憶はさすがに薄れているものの、この旅行のいくつかの場面は、いまだに昨日のことのように思い出せる。後日談になるが、偵察隊の連絡官だった金俊喜さんとは、この 10 年後の正月に梅里雪山の雨崩ベースキャンプで再会することになるとは、これまた思ってもみなかったし、カンペンチン本隊遠征時のもっとも若いチベット人協力隊員だったテンジンが、遭難した梅里隊の C2 まで捜索して雨崩ベースキャンプに戻ってきたのにも驚いた。テンジンは、カンペンチンの時に確か 18 歳で、かれにとって初めてのヒマラヤ登山だった。雪の降りしきる雨崩で話を聞いていると、カンペンチンの後、チョオユーやチョモランマ登山に何度も参加し、立派なプロの登山家になっていたが、カンペンチンで支給された登山靴や装備を自分の始まりの記念としてまだ大事にしまっているといっていた。

蘭塔山偵察隊ラサ到着

さて、当時の中国民航機は大阪伊丹から北京まで一気にはいかず、上海の街中の古い虹橋飛行場に着陸した。機内ではヤカンをもったおじさんの CA がぬるいお茶をついでまわっていたのだが、着陸したとたん降りろと言われ、よくわからないままタラップを降りて、目の前の 2 階建てビルに向かった。2 階に上がると大きなテーブルに座れといわれる。しばらくすると汁そばがでてきた。機内食の代わりだったのかも知れないが、飛行機自体も遅れ気味だったからかもしれない。汁ソバは、とても美味しかったことを覚えている。食べ終わると、皆三々五々おなじ飛行機に乗りこみ、しばらくすると真っ暗な北京についた。薄暗い機内では、税関の申告書類が配られたが、「录影机」とあるのをテープレコーダと取り違えて、持参していることにして提出してしまった。この間違いにあとで気づいて、登山協会に「持っていないよ」という証明書を出してもらったりする顛末もこの原稿を書いているうちに思い出した。当時は、入国時に申告したカメラなどの機器の持ち込みリス

トと出国時検査が合っていないと中国国内で売り払ったということになって結構重大なことになるという話だった。

北京空港は、新しい飛行場になったばかりで中は明るかったけど、迎えの車に乗って飛行場を出ると辺りは漆黒の真っ暗闇で、暗がりの中にロバのひく荷車が大量にいた。そういう時代の話である。本当に真っ暗ななかを前門飯店にむかう。当時の北京は、高くても5階建ての建物がほとんどで、すべてが薄暗いベージュ色だった。どんよりとした空模様のなかを毎朝、津波のように走ってくる自転車に目を見開きながら数日過ごした後、成都に移動し1泊する。橋のたもとの古い形式のホテルで、ずらっと並ぶトイレの個室には扉がなかった。晩飯の後で、バーにいってみると怪しい雰囲気の日本人2名の先客がいた。こちらがカウンターのお姉さんに怪しい中国語で白酒を頼んだりしていたら、乱暴な口調でなにやら怪しい英語で誰何されたりした。中国との貿易は、すでに友好商社を通じた政治的なものではなくなっていたはずだが、それでも、まだまだ怪しい雰囲気を漂わせた日本人とでくわすのだった。(このころの雰囲気は、https://youtu.be/Jq0kpi3NVVk に観ることができる。便利な世の中になった)。

翌朝、暗いうちにラサ行きの飛行機に乗るが、座った座席のシートベルトは、なぜか根元からちぎれており、シートベルトなしのままラサまでいく。当時の中国民航は、前2列の席が人民解放軍など公用に指定されており、混んだ飛行機の場合、我々にはその席があてがわれたりした。

飛行機は、四川を抜けてチベットにはいる。カンチェンジュンガを左手真横に見ると、程なくしてヤルツァンポ川の河原に着陸する。このようなワイルドな飛行場は、その後、ギニアの地方都市の飛行場に着陸するまで経験しなかった。飛行場らしき広場の脇には小さな建物があり、ターミナルとして使われていた。地面にころがされた荷物をランクルに積み込んですぐに出発する。橋を渡ってキチュ(川)沿いの道にはいり車はラサへと向かう。岩に彫られた仏像があるあたりでトイレ休憩の停車。外に出て歩くと軽くクラッとくる。急いで荷物を積んだりして、すこし動き回りすぎたのかも知れないと思う。すでに富士山よりも高く、自分には経験のない高度だった。

遠目にポタラ宮殿がみえてくる。写真でしか見たことがなかったものが、次第次第に大きくなってくる。思わず声がでてしまう。これを観てみたいと思ったのはいつのことだったか。河口慧海師のチベット旅行記を読んでからすでに12～3年は経過していた。そういえば松沢哲郎さんの下宿のドアにポタラ宮殿のポスターが貼ってあった。道の左手に大きな建物が見えるが、コタレが運転手に聞くとラサの鉄道駅とのことだった。しかし、ここに列車が到着するのは、この時から、さらに25年も経ってからのことだ。線路もないのに駅から先に作っておくんだととても驚いた。外国人に開放されたばかりのラサには、外国人を泊めるホテルなどはなく、郊外の軍事基地にある招待所が宿舎だった。隣の部屋にはスイス人の初老の夫婦が旅行に来ていた。一般の観光客のいることには若干驚いた。コータローさんにうながされながら高度順化のために裏山に登るとポタラ宮殿の後ろ姿とジョカン寺の金色の屋根が見えるが、足下には街の方角に向けて大砲がずらりと並んでいた。とにかく先を急ぐので市内観光をしている余裕はなかった。

チベット高原の旅

ランクル1台と荷物運搬用の旧型トラック(第一汽車製造の解放号)1台で旅を始めた。ラサの街の外れには長距離バスの発着所があった。窓ガラスも無いようにみえる古いバスが何台も停まっており、中には「烏魯木齊」などと行き先を書いたプレートが運転席からぶら下がっているものもあった。バスはお客でぎゅう

写真1　ランクルと解放号

ぎゅうに見えたが、この砂埃のなかで羌塘高原をぬけてウルムチまで行くのかと感心してしまったが、この大勢の人達がウルムチまで何をしに行くのかも不思議だった。

ラサを出てヤルツァンポ川を渡る。青裸麦の畑のなかを登りきり峠に出たとたん目の前にブータン国境の白い山々が、眼下には真っ青なヤムドクツォが広がる。こんな壮大な景色は、初めてだったので思わず息をのんでしまった。湖畔におりていくと唐突に現れた招待所。昼食が出される。ラサの招待所と同じような缶詰を調理した中華料理だが、屋根のあるところで昼ご飯が食べられるのはここが最後だった。夕方5時過ぎにギャンツェを通過して、日もとっぷり暮れた頃にシガツェにつく。

翌朝、通りを歩いていると、いきなりサングラスを掛けた中国人に英語で話しかけられる。仕事は情報収集で、チベット語、ネパール語、ヒンズー語も話せるなどという。強い紫外線と乾燥した冷気のなかで、通りに設置されているスピーカーから政治スローガンが早朝の街に響き渡る。「情報収集」をしているという漢族の彼の顔も日に焼けて焦げ茶色になっている。ふと、この人は何年間この仕事を続けているのだろうかと思ったが、きっと僕らについての報告書も書いたのだろう。露天の並んでいる市場があって、雑多なものが並べられていた。おばあさんから刺繍のきれいなチベット靴を買った。日本語の数字の読みとチベット語の数字の読みの類似性は、よく言われていたが、値段を聞いたら、おばあさんが「sum bcu inga」という。まったく日本語の「さんじゅうご」に聞こえる。「にじゅうご」とこちらが言うと、あっさりとその金額にまけてくれたから、現地価格はもっと安いのだろう。でも、アフリカで仕事するようになって、お母さん達が作るこの種のハンドクラフトを値切って買うことに罪悪感を覚えるようになってしまい、最近ではほとんど値切らなくなってしまった。ところで、この靴を日本に持って帰ったところ、妻から匂いについてとても強い苦情を受けて、ナフタリンを大量に入れる羽目になった。その後、留学や就職などで双方の実家に荷物の引っ越しを繰り返すうちに所在が不明になってしまった。ここの露天だったか、本隊の上尾副隊長が、真鍮製の仏像を（こっそり？）買われていたが、あれはまだお持ちなのだろうかとふと思いだした。

シガツェを出てシガールにむかう。すでに収穫の終わった畑には、残った麦ワラをたべさせるために、ウシ、ヒツジ、ヤギが放されている。この当時は、通常のビザで入れない地域が設定されており、いわゆるインナーパーミッションという特殊なビザが必要だった。そのためラサで公印をもらった上で、シガツェを出た先にパスポートチェックをする関所があった。1990年代の雲南省北部でも経験したが、梅里雪山の遺体収容に通ううちにこの制度は廃止されていた。

給油のために人民解放軍の駐屯地にはいるが、民間人が利用するものではなさそうだった。私用車の有る時代ではなかったのでこれでよかったのだろう。兵舎のまえに畑が耕されており、小さな白菜がずらりと植えられていた。兵舎を出て進んでいくと次第に標高が上がり始め、4500mと5200mの峠を2つこした。標高が上がるにつれて、ウシ、ついでヒツジと姿が消えてゆき、遠目ではスコッチテリアのようにしかみえない小型のヤギだけになってしまう。峠の北側斜面を登っていくと多少の植生があるものの南側斜面にはいると全くの砂漠の中の山みたいになってしまい、こうしたところではヤギしか放牧されていない。少し開けたところでは、山の斜面に、石をならべて革命のスローガンが漢字で描かれている。遠くからも読める文字は「毛思想万岁」とか「団結」「起来」、「勝利」的なものだった。当時の北京や成都では、すでに文化大革命の決着が付いていたものの、西蔵自治区では、そうした雰囲気がまだまだ一掃されていたわけではなかったのかも知れない。

峠へ登る途中で昼ご飯を食べる。シガツェの旅館からもってきたパンにハムのような豚肉、飲料は瓶入りの五星麦酒と北京麦酒だった。栓のゆるいビール瓶もあって、中味の量がばらばらだった。道ばたの石に腰掛けて食べていると白黒のカラス（カササギ？）の声が、草木の一本もない谷にこだまする。

5200mの峠は、初めて経験する高度だった。走り回らないように気をつけながらゆっくり歩いてみると足下にアンモナイトが転がっている。しかし、NHKが記録を撮った時の映像から比べると、なんだかとても少なく思えた。1979年以降ここを通過する度に拾っていく人

がいたのだろう。峠をくだっていくとシガールからティンリー（定日）にかけて広がる平野に出る。左手奥にチョモランマ、ギャチュンカン、チョオユーがそびえる。このあたりはふたたび穀倉地帯になるのだろう。刈り取り後の畑が広がり、ふたたび多くの家畜が放牧されている。薄暗くなってからシガールの招待所についた。

シガールでは、裏山に登る。NHK の放送で、この山にある寺を破壊したいきさつについて住民がインタビューを受けていた。実物を目の当たりにすると、草木の一本も見当たらない土礫の山に、泥のレンガと石を積み上げて寺を造営するのにどれだけの年月がかかったのか、その労苦とそれを可能にした信仰心を思って心が痛む。招待所の脇には柳並木の小さな川がながれており、小魚がおよいでいる。そういえば、チベットの人達は魚を食べないということを聞いていたなと思う。シガールをでてティンリーにむかうが、街道筋からそれて、一軒だけぽつんとある家をたずねる。薦をかぶせた瓶からうすい酒を味見させてもらう。後から思えば、これはチャンだった。このあたりからランクルは、ヒツジの大群をかき分けながら進んだ。標高の高い村から羊を連れて降りてくるのか。4000m を超えてくると作物は育たないから、放牧を生業としている村の人達は、穀物を買うためにヒツジを連れて下の村まで売りに来るのか。よく見るとヒツジもそれぞれ小さな荷物を背負わされている。

気がつくと赤茶色の大地の広がりの向こうに、とんがったモラメンチンを従えたシシャパンマが見えてきた。裾野の大きな山で、とっても平たく見える。下から見ているととんがった要素は全くないが、8000m の山を舐めてはいけない。翌年、カンペンチンを登っていくと、こちらの高度が 5000 m から 5500m、6000m、から 6500m、7000m と上がって行くにつれて、シシャパンマもだんだん背伸びをしていく。最後は、すっくりととんがった秀麗な山になって、こちらよりも 1000m 近く高い、その高さを思い知らせてくるのだった。

BC の設置と蘭塔山偵察

シシャパンマの奥に真っ白のとても大きな山がみえる。カンペンチンだった。コタレの説明によるとチベット語のカンは山で、プォは白い、チェンは大きいということだったらしいので、見たまんまの名前である。カンペンチンの手前、左手奥に半月型のポーロン・リが見えており、その後ろに綺麗な三角形の山が見えてきた。これがランタン・リのはずだけど、とにかくとっても遠くに見える。ランクルは、枯草がしょぼしょぼと生える荒涼とした大地を西へ西へと轍をたどるが、目指すランタン・リからどんどん離れてしまう。南方向に左折しないといけないのだが、シシャパンマ BC への轍を拾い損ねたのだった。遠くにはヤクが黒いシルエットになって点々とみえる。

一旦戻ってセルン村による。子どもがわらわらと集まってくる。荷揚げ用のヤクのお願いをしたり、子供達の写真を撮ったりする。顔が真っ黒に写って、造作があまりはっきりしない。ガラスのない世界で、コタレが鏡を少女にあげた話は、とてもよく出来ていた。彼は、この話をもって共同通信に就職するのだった。

シシャパンマ BC の近くまでたどりつく。シ

写真２　ヒツジをかき分けながら進む

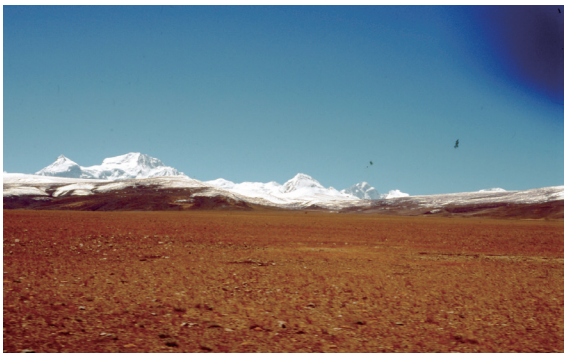

写真３　シシャパンマが見えてきた。奥に白いポーロンリと黒いランタン・リ

写真４　セルン村　ヤクやヒツジのいる暮らし

写真５　偵察 BC　五星紅旗と AACK の青い旗

シャパンマ BC は、アメリカ隊のテントがあるはずだったが、結局そこまで行けず、日が暮れる頃にテントを張った。こっちの登攀用以外の装備は、登山協会の貸し出しであるが、運転手用の寝袋など、日本出発前に聞いていなかった装備もあったり、現地で貸した装備が帰ってこなかったりして、後で請求書をみると予定していた予算から足が出ることになってしまった。5000m という高度は、これまで峠を通過して経験しているものの、車に乗ったまま超えただけだし、そもそもこの高度で寝るのははじめてだった。うまく寝付けない。夜中、セルン村の方角からイヌがワンワンと吠える声とワォーンという遠吠えがずっと聞こえている。もしかすると遠吠えはオオカミの声だったのかも知れない。

翌日から偵察をはじめるが、まず平原をてくてくと歩く。いっこうにランタン・リは近づく気配がない。河原に入ってさらに進むと、ようやくモレーンが見えてくる。モレーンから見おろす氷河には、三角形の氷塔がびっしりと並んでいた。この日は、C1 を 5400m くらいに設営したが、1 日、水の補給なしに行動してしまったせいか、調子はとても悪い。自分は、BC に戻って 1 泊してから C1 に戻ることになる。この日は、金さんのテントでご飯を食べさせてもらうが、乾麺をゆでて中華醤油を掛けただけのものだった。とても質素な食事だったけど、こうした食事で頑張ってきた人達なのだと感銘を受けたのも事実である。金さんを含めこの時代の中国登山協会は、人民解放軍から選ばれたメンバーから成り立っていた。金さんは、中ソ国境のハン・テングリ登頂者だが、頂上アタック時に、同時期に反対側からソ連の登山隊も登ってきているという情報があったらしく、アタック隊は頂上での遭遇戦に備えてピストルを携行したとのことだった。ラッセルをするときに右腰の実弾入りピストルが重くて邪魔でとてもつらかったという話をしてくれたが、中ソ国境紛争の記憶もさめやらない時期だったのか。このキャンプ地では、折にふれて、金さんやランクルの運転手は中ソ国境紛争を日本人はどう思っているのか、中国の味方なのかということを聞きたがった。金さん自身が、ダマンスキー島（珍宝島）の近隣の東北出身の朝鮮族だったせいもあるかも知れないし、彼の登ったハン・テングリ自体も武力紛争のおこった場所からそれほど遠くない場所であったからかもしれない。コータローさんからは政治的な話はしないことという注意を受けていたが、つい肯定的な返事をしてしまう。

BC からのルートは、途中から河原の中を歩くので昼間は水がずっと流れている。昨日ちゃんと飲めばよかったなぁと反省する。その後、C2 を 5500m までキャンプを出して、さらに上部の偵察を進めるが、傾斜があまりないのでモレーン上やアブレーションバレーのジャリでザラザラしたルートを長時間歩いているわりには高度が上がらない。雪も残っていたりもするのだが、こんなところを Lowa のプラブーツで歩くのはとってもつらい。とはいえ、さすがにランタン・リも予想ルートのディテールがわかる程度には近づいてきた。本隊派遣時の ABC を選定するために氷河を横断して先に進もうとする。コータローさんがロープをつけてクレバスを探りながらゆっくりと進んでいく。自分の番になって氷河に入る。青い氷塔の 1 個をピッケ

写真６　BC からランタン・リを遠く望む

写真８　偵察 C2 から氷河を左岸に渡る

ルで殴ってみるが、日本の氷と違ってピックが刺さることがない。キィンと軽い音がしただけで、やけにあっさりと跳ね返されてしまう。黒曜石がはがれたような浅い傷が付いただけだった。雪氷学者のコータローさん曰く、表面がこんなに堅いのは氷が融けているのではなくて水が氷のまま昇華しているからだという説明だった。この話を、ルームに戻ってからすると米谷ミサゴが、ピッケルが刺さらなかった話にやけに感心して「そういう話が､聞きたかったんや」などといっていた。

BC に来てから、ずっとよく眠れなかった。その結果だろうか、C2 で朝飯を作っている最中に、いきなり睡魔に襲われ意識を失ってしまった。どのくらい時間が経ったのか、気がつくと心配顔のコータローさんとコタレがいた。自分はと言えば、酸素をすっている。BC まで一気に降りることになったが、さして高度が下がるわけではないものの距離はずいぶんとあった。

写真７　偵察 C1 からランタン・リを望む

ランタン・リ偵察自体は、これで終了だった。あとは、残された数日間で、西方のカンペンチンを見に行くことになった。ところが、飛行機の手配の間違いで、予約の取り直しに金さんが下山することになってしまい、我々には解放号トラック１台が残されたのだった。荷台に乗り込み、荒れ果てた茶色の土地をすすむ。氷河末端から出ている川を何本も乗り越え、植物群落の膨らみででこぼこしたところをゆっくりゆっくり進む。解放号トラックは、でこぼこを乗り越える度に、川床に降りたり岸に登りかえしたりする度に、右に左に大きく傾き、運転台と荷台がひどくよじれながらもがくように走る。河床にも大きな丸い石がごろごろしていて、右に左にハンドルを切りながら、もだえる幼虫のように進む。まったく、いつ壊れてもおかしくないありさまだった。ふと、この場所はカイラスに向かう河口慧海師が氷河からの濁流にヒツジと共に押し流されて九死に一生を得た場所じゃなかったかと思い出す。そして、突然、ガクンという音と共に動かなくなった。運転手は、ドライブシャフトが折れてしまったという。幸い部品が積んであったので交換することになる。太い棒のようなものが、荷台に錆びた針金でくくりつけられており、メカに疎い自分は、これはなんだろうと思っていたが、ドライブシャフトそのものなのだった。修理工場もガソリンス

写真９　氷河上流を遠望する

写真 10　ドライブシャフト交換中の解放号

写真 11　凍った川で座礁する解放号

写真 12　アフタヌーンフラッドで水没する

タンドもないところを走るトラック運転手としては常識なのか、あるいは、人民解放軍の実践教育なのか、運転手は、１人で大きなトラックをジャッキアップして、ハンマーで部品をたたいたりしつつドライブシャフトの交換を始める。程なくして無事修理は終わったものの、再び走り出して川を渡ろうとしたとたん、今度は岩の隙間にはまってトラックが抜け出せなくなってしまった。いかんともしがたいが、とにかく川から脱出するために邪魔になっている岩を取り除こうとしていると時間がみるみる過ぎていく。上流からザザァという音が聞こえたと思ったら、ついにアフタヌーンフラッドがやってきて、みるみるうちにトラックが床まで水没してしまう。

水はなかなか引かない。そうこうしているうちに暗くなってしまったので、トラックの脱出をあきらめてここで寝ることにした。運転手の陳さんは運転席で寝る。かれは、四川の出身だと記憶しているが、いつもニコニコしていてこんな状況でもとても元気だったが、こんなことはよく起こることなんだろう。ただ、ここの問題は、通常の公路ではないことで、この状況から脱出するのに役立ちそうな車も人も全く通らないことだった。

翌朝、遠くにはヤクをつれた牧民が小さく黒いシルエットでみえている。コタレが、BC にむけて派遣された。飛行機の予約を取り直して戻って来ているはずのランクルに救出に来てもらうためである。残った人間でタイヤを挟んでいる石を取り除く作業を続けるが、しばらくすると、運転手もふらっと元来た方に行ってしまった。流れの中から回収したジャッキを使ったりして、二人でなんとか邪魔な石をどかせることに成功したが、運転手もいないしもう全くすることがない。河口慧海師の本の挿絵には、野営の際にお茶を沸かしている様が描かれていることをおもいだし、お茶でもわかそうと思う。そこら辺に点々と落ちているヤクの糞を拾い集

め、石をならべて火をつける。ライターでは着火しないので、トラックの荷台から緑色のエンジンオイルを持ってきてヤクの糞にかけてみる。火がついた。鍋をかけるが、石の配置はチベット人がよくやっているように3個使って火床を作るのが最も優秀だった。放牧をしているチベット人が、次第次第に集まってくるが、タシデレー（bkra shis bde legs）以外、何かが話せるわけでもなくニコニコしているだけ。コータローさんは、もう少しマシで、プラブーツを指してこれは良い(Yak po duk)とか話している。

BC撤収から帰路へ　北京の顛末

ようやく夜も暗くなってからランクルが助けにやってきた。でもトラックを牽引するには方向が悪く、おまけに段丘が高く川に降りられない。右岸をずっと下流まで行って公路に出てから川を渡って左岸を上りかえしてくることになる。もう全くの夜だった。なんとかランクルに乗り込みBCに帰り着き、その翌々日から帰路についた。一気にシガツェまでとばし、ラサに急いで戻ったものの、なんと飛行機は欠航で、結局予約の変更は全く意味が無かったのだった。ランクルの運転手が、「ラサ観光でもするか？」と言ってるとコタレがいう。確かにその通りだ。他にすることがない。ポタラ宮殿の中や夏の宮殿ノルブリンカやジョカン寺にも行ってみた。ノルブリンカには動物園と称するものがあってオオカミなんかが捕らえられてとじこめられていたが、後年見ることになるドバイの私立動物園とおなじ趣旨の高貴なヒト用の娯楽だったのだろう。

ジョカン寺の入り口にむかって、五体投地で進んでくる巡礼者がいる。ここは、生きた寺だった。ダライラマの出国からすでに20年あまりたつのだが、ポタラ宮殿の中は昨日出て行かれたばかりのような生々しい感じがした。バルコルには露天が出ているが、ヤクの肉屋のほか、野菜、食器や衣服など雑貨類を商う生活必需品の屋台が多く、そこには英語を話すネパール人の行商人もやってきていた。ポタラ宮殿の麓の屋台で、おばさんが、ヤカンにチャンをいれて1杯ずつ売っているので1杯飲んでみたりもした。プツプツと泡がコップにくっついている。ネパールには行ったことがなかったので、チャンというのはこういうものかと思うが、中国語で青裸酒とよんでいた。値段はもう覚えていないが、当時は兌換券をだして硬貨が戻ってきた記憶があるから一番小さい1角紙幣を出したのかも知れない。後日、雲南省に行く機会がふえてしまうのだが、デチェン（徳欽）のチベット自治州で青裸酒をたのむと、こちらでは、まごう事なき白酒が出てきてとても驚いた。

シガツェあたりから食欲が復活し、いくらでも食べられる。往路のあのダメな感じはなんだったんだろうか、やはり初めてで、とても緊張していたのかもしれない。ラサの招待所でも、バルコルの肉屋でヤクの肉を買ってもらって焼き肉にしてもらったりする。串焼きヤク肉を想像していたらみごとな中華料理になってしまい、拍子抜けだった。成都の中華料理屋では、あの激辛料理に対してもまったく食欲が止まらない。山椒と唐辛子で、唇が腫れてタラコのようになってしまう。飛行機が来ない成都でものんきに動物園や毛沢東主席の巨大な石像のたつビルにはいっている商店で錦布を買ったりした。成都動物園にはジャイアントパンダがたくさん飼育されていたが、お客の誰一人として見物している人はおらず閑散としている。成都の人達はさしてパンダに関心がなさそうだった。一方、黒山の人だかりができている場所はパンダではなくトラの檻だった。中国の人達は昔からトラが怖いのだという話を聞いていたが、その通りだったのかもしれない。成都からコータロー隊長が、京都に電話をすると、驚愕の一報。なんとランタン・リは我々が偵察しているときにネパール側から日本隊が登頂してしまったのだという。

北京に戻ると、迎えの斎藤Yさんと上尾さんが待ち構えていた。両氏は、すでに蘭塔山か

写真13　河口慧海師のマネをしてみる

ら康彭欽への許可変更の交渉をおこなっていた。わざわざトラックが壊れるようなことまでして西方のカンペンチンを偵察したのは、ポコさんにお知らせするためだけだったのか、それともコータローさんにすでに予感があったのか。事態の成り行きに、なんだかあっけにとられてしまった。

それはともかく登山協会で今回の偵察隊のお金の精算をすることになるのだけど、請求されたものの中にこちらの責任を越えるものが装備費や宿泊費などを中心にいくつも含まれており、これは払えないあるいはさすがにこれは負けて欲しいということでずいぶんと粘ってしまった。ラサなどは1人1泊3万円の料金で飛行機の欠航となると今回だけでもたちまち30万円ほどの増額になってしまう。通訳は、中国登山協会レジェンドの許競副主席にして頂いたが、50万から100万円ほどを値切ったものの長時間このような高位の方に通訳をさせた上に、連絡官だった金さんの顔をつぶすような格好になってしまい、この年になって思うと全く若気の至りと赤面してしまう。翌日、登山協会の書記の方が、登山契約の入山料が昨日変更になりましたと新しい書類を持ってこられる。未踏峰の値段を決めていなかったので、今回未踏峰については値上げしますと宣言された。きのう50-60万円ほど値切ったら翌日200万円ほど増額されてしまうという結末だった。

帰国前日夜の宴会では、大蔵大臣などといわれてよってたかって白酒をむちゃくちゃ飲まされてしまう。なんだか敵を取られたようなありさまで、翌早朝、ほとんど急性アル中状態のまま上海経由で帰国した。ワイさんがご存じの上海では街に出て著名なレストランで昼食を取るのだが、全く食べられる状態ではない。怪訝な表情のウェイトレスに「不好吃？」などと聞かれてしまう。上海の出国では例の「录影机」について証明書を出すと、今度からこういうことの無いようにと税関職員に注意されただけで済んだ。機内では、トイレに籠もったまま夕方伊丹に到着した。ワイさんが新河端病院まで連れて帰ってくださって、リンゲルの点滴一本でようやく回復したが、全く面目ない有様で、平井ポコさんからは、そんな体の弱いやつを行かせていいのかと叱責もうけてしまうことになる。

あらためて思い出すこと

はじめての海外渡航が中国で登山もチベットというのは、当時の山岳部ではかなり特殊な状況だった。ネパールにもパキスタンにもブータンにも行ったことがない。岩坪ゴローさんが、「はじめていったところに登山家は縛られるンや」とおっしゃっていたが、確かに、そのあと梅里雪山の捜索や遺体収容でなぜか中国に通うようになってしまったし、雲南農業大学と提携したので、日本人学生を引率して昆明へ語学実習にいったりするなかで、旅行に必要最小限の中国語も使えるようになってしまった。自分一人で、明永村の人達と氷河に向かうこともあったが、かれらと世間話を中国語でなんとかするくらいにはなっていた。

蘭塔山に直に触れるまえに康彭欽に切り替わってしまったので、記憶の中の「蘭塔山」は、急激に色褪せ、輪郭もおぼろげになり、ついには消えてしまったかのようだった。ポコさんの訃報に返信した際に「ランタンリルン」と書いてしまい、上田ポッポさんから「ランタン・リや」と訂正される始末だった。今回、原稿を用意するに当たって、当時のスライドを見返しながら、綺麗な山だったなと改めて思い返しているし、たぶん登れただろうなとも思った。カンペンチンは、その後スペインの登山隊が登頂したという話も聞いたが、ランタン・リのチベット側は誰か登る人がいたのだろうか。

カンペンチン初登頂から雪氷生物学研究へ

幸島司郎

1982年のカンペンチン峰遠征に参加したのは26歳の時だった。大学院受験に2度失敗し、25歳でようやく京大理学部動物学教室の大学院生になった私は、当時、修士研究としてセッケイカワゲラ（写真1）の研究をしていた。セッケイカワゲラは真冬の雪の上で成虫が活動する変わった昆虫だが、雪の上でなにをしているのか？幼虫はどこにいるのか？など、その生

写真１　セッケイカワゲラ

態はまだ謎だらけだったからだ。冬には比良の武奈ヶ岳の雪の上にテントをはって暮らし、夏には立山の剱沢でゴミ拾いのアルバイトをしながら調査した。そして彼らが雪や氷の環境に実に見事に適応して生きていることがわかるにつれ、「氷河にも虫がいるのではないか？」と妄想するようになった。

当時、氷河は非常に無生物的な環境だと考えられており、昆虫が生息するなどという報告はいくら探しても見つからなかった。しかし、つい１万年ほど前まで立派な氷河だった剱沢雪渓にもセッケイカワゲラの仲間がいるのだ。だから、いないはずはない。報告がないのは、これまで誰も本気で探さなかったからだろう。だったら自分で探しにゆこう、と考えたのだ。そこで博士研究のテーマを「氷河にいるはずの昆虫の研究」に決め、なんとか氷河にゆこうと、雲南やヒマラヤ、パタゴニアなどを対象にした、いくつもの遠征計画の立案にかかわった。ところが政変やメンバー予定者の遭難などいろいろあって、いずれも実現することができなかった。そしてそんな紆余曲折をへて、氷河での調査が初めて実現したのがカンペンチン峰への遠征（京都大学西蔵高原学術登山隊）だったのだ。

私にとっては初めての海外遠征だっただけでなく、そもそも海外に行くのが初めてだったので、日本を出発してからは、見るもの聞くもの全てが珍しく、新鮮だった。黄砂にかすむ北京の街を行き交う人民服の人々、早朝の成都の道路をうめる自転車の海、ラサの寺院の周りを五体投地しながら進むチベットの巡礼者たち等々、今でもはっきりと目に浮かべることができる。特に、ラサからベースキャンプまでの道のりで目にしたチベットの雄大な自然にはすっかり心を奪われてしまった。

ラサからは、うねうねと褶曲した岩層がむき出しになった、荒々しい岩山の間を延々と走る。集落に近い岩山の斜面には、白い石を並べて大きく書かれた「毛主席万歳」などの文化大革命時代のスローガンの痕跡がいくつも残っていた（写真 2）。四人組批判後に崩されたと思われるものも多い。作るのも壊すのも大変な作業だったろう。ものすごいエネルギーだ。途中で通過した標高 5000m を超える峠では、初めて氷河を間近に見ることができた。あまりにも荒涼とした氷河の姿に「本当に虫が見つかるだろうか？」との疑念が一瞬心をよぎる。

こうして、ほとんど植生のない岩山ばかりの道を抜けると、ヒマラヤ山脈北面に広がる標高 4500m を超える大草原に出た。草原はまだ茶色く枯れているが、これまで走ってきた乾燥して植生のない岩山地帯とは対照的に草に覆われた豊かな環境だ。左手にはシシャパンマ峰など、ヒマラヤの巨峰群が草原の彼方にそびえ立っている。初めて見るヒマラヤの山々に心が躍る。草原につけられた轍をたどって、道なき道をさらに走り続けると、枯れた大草原のかなたにカンペンチン峰が小さくポツンと姿を現した（写真 3）。近づくにつれ大きくなるその姿は予想以上に立派で美しかった。

こうして到着した、カンペンチン峰を正面に望む標高 5000m 付近のベースキャンプ予定地の草原は、まだうっすらと雪に覆われていた（写真 4）。雪はすぐに融けたが、雪のために予定より遠くに BC を設置することになってしまった。そこで、標高 6000m 付近の地点に ABC（アドバンスドベースキャンプ）を設置することになった。

ABC への物資輸送にはヤクを利用した（写真 5）。近くの集落でやとった 2 人のヤクパ（ヤク使い）といっしょに泊まりがけで荷上げしたのだが、夜にテントでウィスキーを飲ませたら酔い潰れてしまい、翌日昼まで起きられなかった。おかげで夜の間にはるか遠くまで移動してしまったヤクを連れ戻すのに大変な思いをした。木がないので、ヤクを繋いでおけないのだ。

BC 周辺の草原ではさまざまな野生動物を見ることができた。筆頭はキャンとよばれるチベットノロバ（写真 6）だ、数頭から 10 頭く

らいの群れで大草原を疾走する姿は壮観だった。信じられないことに、そのうちの一頭を中国側隊員(確か運転手)が銃で撃ち殺してしまった。今では考えられないことだ。しかも自分達で食べるわけではなく、チベット人もタブーがあって食べないそうだ。始末に困って近くの集落で引き取り手を探したところ、1家族だけロバを食べる家族が見つかったので、引き取ってもらったという。その家族は「ロバ食い」とか呼ばれて差別されているのかもしれない。その他、BC から ABC への荷上げのために草原を歩いていると、草原のくぼみにうずくまっている野ウサギやキジに似た姿のサケイの仲間、砂地に穴を掘って住んでいるトカゲ（アガマ属のトカゲ）（写真 7）によく出くわした。

標高 6000m 以上の ABC 周辺にまで登ると草

写真 2　岩山のスローガン

写真 3　カンペンチン峰遠景

写真 4　到着時の BC

写真 5　ヤクを使った ABC への荷上げ

写真 6　チベットノロバ

写真 7　BC 周辺の草原に住むトカゲ

は少なくなり、クッションプラントと呼ばれる地面に張り付いたユキノシタ科の木本植物（写真 8）や草丈の低いケシやリンドウなどの高山植物、岩の表面を覆う色とりどりの地衣類の世界になる。目立った動物としてはナキウサギがいたようだが、足跡だけで、姿を見ることはできなかった。何より驚いたのは、夜、ABC のテントを出るとヘッドランプの光に蛾が飛び込んできたことだ。まだ早春の 3 月で ABC 周辺は雪に覆われており、気温はマイナス 10 度以下だったのに、飛べる昆虫がいたのだ。胸部がフサフサした長い毛におおわれたヤガの仲間だった（写真 9）。ランプにぶつかって地面に落ちても、止まることなく激しく翅を羽ばたきつづけている。飛翔筋を動かし続けることで体温を保っているのだろう。クッションプラントに開けられた穴の中から蛹が見つかったので、幼虫はこの植物を食べて成長するらしい。帰国後に国立科学博物館の専門家に見てもらったところ、新属新種の蛾であることが明らかになった。

ABC からしばらく登った地点から上は氷河上のルートになる。頂上から ABC 方向に流れ下る氷河の支流上に C1 を設置し、その支流を登って頂上に続く氷河の大斜面に出た。そして頂上直下の氷河の上端付近に C2 を設けて登頂したのだ。私にとっては、これが初めて氷河の上を歩く経験だった。何年もかかってようやく実現したチャンスだったので、登攀中も時間が許す限り氷河の上をあちこち歩き回って昆虫を探した。しかし残念ながら、ここでは何も見つけることができなかった。

しかし、頂上からの景色はすばらしいものだった。チベット側には茶色く枯れた広大な草原が広がり、半分白く凍結したペク湖や凍っていないランチャン湖など、大小さまざまな湖も見える（写真 10）。ネパール側に目を移すと、シシャパンマ峰やランタンリルン峰など、ヒマラヤ山脈の主脈に連なる数々の 8000m 峰や 7000m 峰が折り重なるように並んでいる。特にランタンリルン峰は、距離が近いこともあって、ひときわ立派にそびえ立っていた（写真 11）。

写真 8　ABC のクッションプラント

写真 9　ABC の蛾

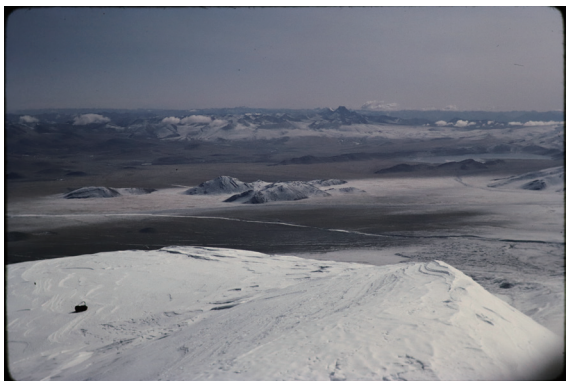

写真 10　頂上からのチベット高原

写真 11　頂上からのランタンリルン峰

実は、この遠征から帰ってから数ヶ月後に、頂上から見えたランタンリルン峰のあるネパールのランタン谷にあるヤラ氷河という小さな氷河で、念願だった氷河に生息する昆虫を発見することになるのだが、この時は知るよしもなかった。当時、名古屋大学水圏科学研究所におられた故樋口敬二さんの科研費による氷河調査隊（GEN）に参加させていただいたのだ。今から思えば、カンペンチンの氷河で昆虫を見つけられなかったのは、まだ早春で氷河がほとんど融けておらず、全面が厚い雪に覆われていたからかもしれない。

登頂後は、ABC や BC 周辺で昆虫などの生物を調査したり、ペク湖やランチャン湖というアルカリ性の湖で魚類などの調査を行った。特に、ランチャン湖は凍結しておらず水深も浅かったので、ゴムボートを浮かべて調査した。水深 40 － 50cm の湖の底は、オレンジ色のゼリーのようなコケムシの仲間におおわれていた。水面にはたくさんのカモメの仲間も浮かんでいる。寒いのでウェットスーツを着てゴムボートに乗り込み、投網やタモ網で魚を採集した。ここでは、腹部の一部が透けていて内臓が見えるので裂腹魚とも呼ばれる、ユーラシア内陸部に特有のコイ科の魚を採集することができた（写真 12）。ヒマラヤの山々を望む大草原の中の湖に浮かんで、たくさんのカモメを眺めながら魚取りするのは、不思議な体験だった。

写真 12　ランチャン湖の魚

BC の周りの草原では、小型哺乳類を採集するためのトラップ（シャーマントラップ）を 20 台くらい仕掛けたのだが、一晩のうちに全て無くなってしまった。BC の近く（と言ってもかなり遠い）集落の住民に持ち去られたのだ。彼らは目が良いので、遠くから私がトラップを仕掛けるのを見ていたらしい。中国隊員にお願いして集落のリーダーにかけあってもらったところ、あっけないほど簡単に全て返してくれた。トラップは加工しやすいブリキでできていたので、彼らにとって魅力的だったらしい。フタができて水が漏れない容器、空き缶、ロープ類も人気があり、テントの外に出してあるとすぐに無くなった。だんだん大胆になって、BC の撤収が近づいた頃には、人が寝ているテントの張り綱を切って持ち去る猛者も現れた。よほど欲しかったのだろう。登頂を終えて BC に帰ると、テントの脇に積んであった、私の着替えを入れたダンボールが箱ごと無くなっており、おかげで、山の格好のまま日本に帰ることになったのも、今となっては良い思い出だ。

帰国後、ネパールでの氷河調査隊に参加して氷河昆虫を発見してからは、氷河生態系の研究で学位を取り、その後 40 年近く、世界各地で氷河生態系の研究を続けることになった。ふり帰ってみると、氷河昆虫こそ発見できなかったものの、カンペンチン峰への遠征に参加したことが、私の研究者人生の大きな転機となったことは間違いないと思う。このように得難い機会を与えてくださった、故近藤良夫隊長をはじめとする AACK の諸先輩方に、この場をお借りして心より感謝申し上げたい。

されど 40 年

中川　潔

5 年前にニセコに移住した。我がログ小屋の道路を隔てた目の前に、大きな別荘が建った。建て主は自称、香港の弁護士という触れ込みだったが、ふたを開けてみれば中国大陸出身の金持ちだった。建築費用を尋ねると、我が小屋の 20 倍近くもつぎ込んでいた。大陸のグレーマネーであろう、半端ない金額である。建設にはニセコ界隈の建築関連業者が群がった。建て

主はスキーと温泉がお目当てのようだが、コロナの影響もあり、ほとんど来ていない。彼にとってこの別荘は、オーストラリアやフランスの別宅と同じ扱いで、所有不動産の一軒に過ぎない。人が住んでないと、建築物は自然と痛んでいく。特に冬は3メートルを軽く超える積雪と猛吹雪に見舞われ、しっかり面倒をみてあげないと、痛み方が早い。でも、建て主は意に介していない。金さえあればどうにでもなると考えている。そういう中国人富裕層がニセコ一帯の土地を買い漁っている。カンペンチンから40年、中国の富豪たちが日本を跋扈する時代が、ここまで早く来るとは想像していなかった。

偵察隊に参加した40年前、文化大革命明けの北京の朝。前門飯店の客室のカーテンを開けると、自転車の大群が通りを埋める光景を目にした。過酷な文革から解放された明るい表情が静かに目の前を行き過ぎていくのが印象的だった。成都の錦江飯店に勤務していた19歳の清楚な女性従業員は、独学で日本語を学んでいた。こちらも片言の中国語でチャレンジして、爽やかな会話が弾んだ。十数年後に錦江飯店を訪ねて消息を聞くと、日本人男性と結婚して今は日本に住んでいるという話を聞いた。ショックだったが、そんなことはどうでもよい。とにもかくにも、貴重な外貨獲得源という特殊身分の遠征隊を、当時の中国当局は手厚くもてなし、学生の分際で「貴賓」扱いされた目に、中国人の暮らしぶりはどこまでも「清貧」に見えた。毛沢東への憧憬も加わって、そう見えた。40年を経て、ニセコに押し寄せる中国人のどこを探しても、その「清」も「貧」も見当たらない。「成り上がり」という言葉が思い浮かぶけれども、そういう感情はしまって、冷静に今の中国の発展を見るよう心掛けている。

カンペンチンがきっかけで、この40年間、新聞記者として正面から中国と向き合ってきた。少数民族問題は、主要テーマの一つであり、中国当局は常に「敏感」な問題として神経を尖らせている。遠征当時のチベットの状況を思い返すと、文化大革命で宗教が徹底弾圧され、チベット寺院の多くが壊滅状態にあった。それでも当時の中国共産党は文革の「やり過ぎ」を内心では認めているようであり、漢人のチベット人に対する差別意識は強かったものの、その扱いにはどこか柔らかさがあった。我々の行動に対する監視も、それほど強くなく、日本の学生を未踏峰登頂後に遊牧チベット民が暮らすセルン村に解き放つことなど、今ならあり得ないだろう。

遠征のおかげでチベット問題を扱う際に、その土地勘と人的交流が役立った。北京滞在中の1996年夏、当局の手配で外国人記者を対象にしたチベット取材団が組まれたので参加した。漢人のチベット進出が本格化し始めた時期で、「宗教と経済の相克－自治区創立31年のチベット」という3回続きの企画記事を書いた。遠征当時とは様相がかなり異なっていた。国家予算をふんだんに投入してチベット人の生活レベルをボトムアップし、インドに亡命しているダライ・ラマ14世からの引き離しにかかっていた。当局者は「宗教は発生、発展、消滅という一定の規則性がある。生活が向上するに連れて信仰心は薄れていく」と自信ありげだったが、若いラマ僧は「チベット民族は物質文明より精神文明を大事にする。生活がいくら豊かになっても宗教上の精神的安定が得られなければ満足しない」と言ったのを思い出す。1996年といえば、鄧小平氏の南巡講話から4年、天安門事件の傷跡を置き去りに、改革開放へと真っすぐに進み始めた時だった。当局の付添人が夜間も寄り添い、取材への介入は厳しかったが、それでもラマ僧へ接触することはできた。遠征の時よりは厳しくなったが、それでも現場に柔軟な対応が許されていた。それが今や、外国人記者のチベット現地での取材は、ほとんど認められなくなった。2006年に青海省西寧とラサを結ぶ青蔵鉄道が全線開通し、当局はチベットへのテコ入れを一層進め、ダライとの対話も遮断して統制を一段と強めている。

中国共産党は列強の植民地支配という屈辱の歴史から中国を解き放つことを最大の存在理由にしている。執政能力に欠け列強の侵略を許した末期の清王朝の轍は二度と繰り返さないという強い意志がそこにある。清王朝はチベットを藩部として扱い、自治を認めて統治したが、それが独立運動につながっていった。緩めれば独立運動が再燃する。清朝の失敗を教訓にチベットを強くグリップするというのが今の基本方針である。18世紀からのチベットを巡る200年以上の統治史を考えれば、カンペンチンから現在までの時間は「たかが40年」であるものの、

中国復興の急激な経済発展をエンジンに民族同化を一気に進めた時間であり、チベット人にとっては取り返しのつかない40年になったように思える。

北海道の白老町に2020年、日本政府肝入りの「ウポポイ」が開業した。アイヌ文化の復興を目指し「民族共生象徴空間」と銘打った施設。建物は立派なのだが、展示館はガランとして中身は薄い。折角なので付帯の体験学習館でアイヌ料理の体験講習会に参加し、一度食べてみたかったオハウというアイヌの煮込み料理を学んだ。講師こそアイヌの血をひく若い女性だったが、日本のどこにでもあるような料理教室の施設で、どう見ても近くのスーパーで仕入れた食材を使った鮭の澄まし汁をつくった。アイヌの「文化」をどこにも感じ取ることはできなかった。ここまで同化が進んでしまうと、その罪滅ぼしを目論んでも不可能だろうとオハウを試食しながら思った。

チベットとアイヌで決定的に異なるのは宗教の有無である。モンゴル族をも虜にしたチベット仏教の吸引力を考えれば、日本と同じような同化政策がうまくいくとは思えないが、それでも物質文明の力は侮れない。セルン村で当時24歳だったケサンさんも生きていれば64歳。漢人文化とは縁遠い遊牧の村で、昔ながらのチベット人の生活を営み、干した羊肉をほおばっていた彼女たちの暮らしぶりはどう変わっただろうか。遠征から40年、それが最も気にかかっている。願わくは、チベットに「ウポポイ」のような罪滅ぼし施設ができないことを祈っている。

偵察隊

横山宏太郎

はじめに

カンペンチンをほんの少しだけ偵察した。正しくは「偵察に向かっただけ」かもしれないが、その縁で、カンペンチン特集の最後に少し書かせていただきたい。この特集の編集を進めている最中に、今井一郎君の訃報が飛び込んできた。今井君は、カンペンチン初登頂に至る道筋の出発点ともいえる、ネパール側からのランタン・リ偵察（1977年）に参加してくれた。その訃報を伝えてくれたのはチベット側偵察隊員の牛田一成君というのも不思議な縁である。今井君のことを少しでも書いておきたいと思ったことが、この一文のきっかけである。

ネパール側偵察へ

よく偵察に行った。まず1975年にカラコラム・ビアフォ氷河、これは登山ではなく氷河調査のための偵察だが、ラトック峰をめざす日本山岳会東海支部のカラコルム学術登山隊（原　真隊長）の学術班二人のうちの一人として行った（本隊とは別行動）。ラトックやバインタブラックなど、ビアフォ氷河北岸の岩峰群に注目が集まり始めた頃だった。初めてのヒマラヤで、経験はもとより知識もろくにないのに、大した準備もせずに、一人で出かけた。学術班のもう一人（初対面）とは現地でおちあって、ビアフォ氷河へ二人で入った。彼の不調が風邪のためと思っていたが、後で考えれば高所の影響が出ていたようだ。ビアフォ氷河を上ってスノーレイクを見てきたかったが、時間切れで届かなかった。いま振り返れば冷や汗と反省ばかりだが、これで、「なんとかなる」という妙な自信がついた。

1976年はネパールで氷河調査に参加し、翌年にランタン・リの偵察に行くことになった。当時はAACKとKUACの関係は良いとは言えない状況で、私より下の学年ではAACK入会者はごく限られていた。そこで、偵察隊の隊員二人を募集するとKUACに伝えたところ、今井一郎君と佐治与志也君が応じてくれた。この3人で1977年秋、ネパールに向かった。

近づいて見るランタン・リは美しい山だった。頂上は真っ白な雪のピラミッド。可能性のあるルートは、南西稜。ランタン氷河を詰めると南西稜上のティルマンのコルに至るのだが、大きく左に曲がる氷河をショートカットするように支流の小氷河からランタン氷河源頭の雪原に出るのがよいと分かっていたので、我々もそのルートを採った。最後は、南西稜を今井君と二人、5800mあたりまで登って偵察を終えた。ガスが出てきたので下ることにしたが、尾根は

ずっと堅雪でアイゼンがよく効き、気持ちよい登攀だった。

当時の私たちの理解では、このあたりはランタン・リ南西稜などランタン氷河上流部を囲む分水界がチベットとの国境で、南西稜の向こうがチベットのはずだった。ただ、国境の画定はまだなされていなかった。なにしろ、ネパール政府はランタン谷奥の地形を把握しておらず、ランタン・リの存在も、地形が正しく描かれている地図をもとに説明して納得してもらったのだった。その後、国境線は分水界とは違う形に引かれ、南西稜自体がチベットに入ってしまったのは、思いもよらないことだった（1981年に判明）。

ともあれ「チベット」はなんといっても「禁断の地」であり、いつかは行ってみたいと思っていた。しかし当時の政治情勢では、可能性などまったくわからない。それだけに、ティルマンのコルに立って眺めた景色は、写真などで見るいかにもチベットらしい高原の様子とは違っていたが、チベットへの憧れをかき立てるには充分だった。

帰路は聖地ゴサインクンド経由で、カトマンズ近郊のスンダリジャールまで歩いた。標高が下がるにつれて、村や人びとの様子が変わっていくのも興味深かった。9日間の楽しいトレッキングだった。

カトマンズに戻り、偵察隊として予定の行動は終わったので、私は二人に、一人旅を勧めた。二人は偵察隊員としてよくやってくれたと思うが、どうしても私を頼る、判断や指示を待つ、といったところが見受けられた。二人は初めてのヒマラヤで私は3回目という経験の差があるので無理のないことだった。とはいえ、実は私の経験も大したことはなかったのだが。それを打破するには一人旅である。当時のネパールは外国人旅行者にとってわりと安全だったと思うので、二人を送り出すのにためらいはなかった。二人はそれぞれ結構な期間の旅をして、日本に戻った。この経験は、その後の二人になんらかの役に立ったのではないかと思っているのだが、直接尋ねたことはない。

私はカトマンズでランタン・リの登山許可取得交渉を続けた。郊外の観光省まで自転車で行って、担当者（かなり高位）と世間話から始めて許可の話をする。帰り道で買い物などして「家」に帰る。カトマンズにはちょうど「カトマンズ･クラブハウス」ができたばかりで､我々も宿舎として利用した。これは北大山岳部関係者が中心になって、カトマンズに活動拠点となる建物を作ったもので、私も縁あってそこに参加していたので利用でき、ちょうどよかったわけである。

何度も何度も足を運んだかいあって、「ランタン・リが解禁されたら許可を出しましょう」という約束を取り付けて私は翌年春に帰国した。いわゆる「First　Priority」と呼んでいたもので､ヤルンカンと同じかたちである。後日、ネパールはこの約束を守ってランタン・リの登山許可をAACKに与えてくれたのだが、それを残念ながら生かせなかったのはご存じのとおりである。

チベット側偵察

1979年秋、私は日本山岳会のチョモランマ偵察隊の一員としてチベットの地に立つことができた。2年前には思いもよらなかったことである。翌年の同本隊の経験もあって、1981年のチベット側偵察隊長を務めることになった。隊員は牛田一成君と中川潔君、二人とも初ヒマラヤだった。

カンペンチン隊は、ある面では、中島暢太郎先生の力をフル活用した隊と言えるかもしれない。気象協会から、森本グロン登攀隊長だけでなく、陳介臣さんも参加された。のちに近藤クリマン君は気象協会に入る。しかし、その力を借りたとしても､自分が偵察も行くのは無理だ、頼む、とグロンは言う。私は翌年の本隊は無理だが偵察だけならいける、と引き受けた。グロンはネパールに提出した最初のランタン・リ登山許可申請からの、いわば同志である。思わぬ形で、チベット側から登ろうとしているが、志は続いていた。

私にとっては3年連続のチベットである。まず北京で中国登山協会（CMA）と打ち合わせをして成都に飛び、さらにラサに飛ぶという経路も変わらない。CMAでは、許競さんや陳尚仁さんなど横山にはチョモランマで顔なじみの人たちが世話してくれるし、連絡官は、チョモランマに高所協力員として参加していた金俊喜さんである。シシャパンマ隊の隊長だった許競さんは現地の事情に詳しいので、いろいろ教え

ていただく。皆さんの親切に、偵察もうまくいきそうな気がしてくる。しかしお金は、チョモランマの経験もあって用心はしたが、しっかりとられていた。

シガールを出て蔵尼公路を進み、ロンブク寺・チョモランマ方面への分岐を過ぎると私にも初めての道となる。やがて蔵尼公路からの分岐点があった。ここから西に向かうのは、草原の中のわだちのような道である。いよいよ偵察らしくなってきた。広い高原を車で走りながら目的の氷河への谷を探すが地形のメリハリがないので難しい。結局、予定よりだいぶ手前に BC をおくことになった。

予定通りいかないこともままあるのが偵察、ともいえるが、現地ではさらに不測の事態が続き、カンペンチンの偵察はほとんどできなかったし、ランタン・リはその間にネパール側から登頂されてしまったことも帰路の成都で知った。そんな残念続きの中で、二人の隊員の活躍がのちへの希望となった。本隊の大成功はご存知の通りである。偵察活動については、カンペンチン報告書に、また AACK 時報 9 号にも報告を書いたので、ここでは繰り返さない。そしてこの Newsletter103 号には、牛田・中川両隊員の文があり、それを補ってくれる。

今井一郎君のこと

私の手元に、彼の著書が 1 冊ある。「パピルスの賦」という。2000 年 7 月の発行だから、彼は 40 代なかごろだ。ランタン・リ偵察から 23 年も経って、全く分野の違う私にも、義理堅く贈ってくれたものだ。フィールドでの活動を選んだ彼の中では、あのネパール行がどんな意味を持ったのだろうか。

「アフリカ・ザンビアの大湿原で漁師と共に暮らした人類学者のフィールドノートから、自然に根ざした賢明な環境利用が浮かび上がる――！」と裏表紙のカバーにある。中部アフリカでの約 3 か月にわたる調査の記録だが、淡々とした文章でそこに生活する人々との交流や日々のできごとが綴られるとともに、観察と調査に基づいて彼のテーマである「漁撈」の実際を描き出している。

あとがきにあたる文からは、彼の誠実さが各所に見える。彼は、「日本を含めた『先進国』の人びとが、いかに『第三世界』の人びとの地域に根ざした生きざまを知らず、彼らから学び取る姿勢に欠けているか、という現状に対して、私なりに発言したかったのである。」と本書を著した動機の一つを語っているのだが、20 年以上が経って、その状況はどれくらい改善されたのだろうか。

「これからもチャンスがあれば、調査地で出会った人びとと私とのささやかな交流を綴っていきたい」とこの文を結び、それからも調査を続け、その途中に不運にも事故に遭った。誠実な人類学者のフィールドに生きた姿を偲び、謹んでご冥福をお祈りする。

その後のこと

1985 年のブータンヒマラヤ、マサコン峰では先発隊で現地に入り偵察をした。1988 年は梅里雪山偵察隊長を務めた。思えばよく偵察に行ったものだ。偵察はよくわからないから行くわけで、したがって行くのは面白そうな場所である。ある山岳団体の幹部（もちろん実績充分の登山家）が、「横山というのはけしからん、実力もないのに面白いところには顔を出してくる」と言ったとか伝わって来たのはいつ頃だったか。真偽定かではないが、「それもごもっとも」である。私の登山歴など言うに恥ずかしい程度のものだし、長い大学院時代は国内では何もしていなかったので（アルバイトはしたが）、機会あればすぐに飛び出して行けただけのことだ。実は「偵察屋」をひそかに自認してもいた。そう呼んでくれるひとがいればうれしいと思ってもいた。しかし私の関わった隊のうちカンペンチンは無事大成功を誇れるが、梅里雪山ではつけた道筋が思いもよらぬ痛恨事につながってしまった。いまではその名を苦みを伴って受けることになる。

注

今井一郎君（京大山岳部 1974 年入部、関西学院大学教授）は、2022 年 8 月 19 日、アフリカ・マラウィ共和国のマラウィ湖において調査中、事故により逝去された。

「パピルスの賦」：今井一郎、2000 年、近代文芸社、本体 1000 円＋税　ISBN4-7733-6668-0

「カトマンズ・クラブハウス」については、「寒冷の系譜　北大山岳部九十周年記念海外遠征

史」（北海道大学山の会、2015）p.359-360 に　　経緯が記されている。

図書紹介

『今西錦司と自然』（日本の伝記　知のパイオニアシリーズ　第６回配本）

斎藤清明著

玉川大学出版部　2022 年 8 月 1 日

2,750 円（2,500 円＋税 10%）　ISBN978-4-472-06022-9

編集人　横山宏太郎

斎藤清明さんはこのたび玉川大学出版部から、「今西錦司と自然」を出版されました。この本は小学校高学年以上向けとなっていますが、大人にとってもわかりやすい「今西錦司伝」といえます。

Newsletter でもぜひ紹介したいと思いましたが、たいへんユニークな本ですから編集人にはうまく紹介する自信がなく、それなら著者にお聞きしてはどうかと考え、「紙上インタビュー」を計画しました。

さいわい斎藤さんにご協力をいただきましたので、以下に掲載します。

＜編集人＞　はじめに、この本が収められている「日本の伝記　知のパイオニア」シリーズについて伺います。

日本で「偉人の伝記」というと、戦国時代、江戸時代、幕末あたりの時期の人物が多く取り上げられているようです。明治以降では、野口英世や福沢諭吉が代表格でしょうか。

それに対して、ここで取り上げている人物は、岡倉天心や寺田寅彦、宮本常一、柳宗悦と、かなり傾向が違います。私にとっては伝記を読んでみたい人たちですが、一般受けという点ではどうでしょうか。さらに、本書では今西錦司です。これまでほとんど取り上げられなかったひとたちですね。

それをとりあげて「知のパイオニア」とうたうこのシリーズの意図はどんなことでしょうか。本の中では特に説明はないので、斎藤さんにお伺いします。

＜斎藤＞　ちょうど 4 年前、子ども向けの今西さんの伝記をと執筆依頼がきました。いままでの「伝記」のイメージを越えるものにしたい。生涯のどこに焦点をあてるのか、何を表現すれば被伝者の本質を読者の子どもに伝えられるか、その絞りこみを任せます。これまでの児童書の書き手のようではなく、被伝者に深く関わっている研究者として書くようにというものです。

パイオニアは開拓者・先駆者と訳されるように、近代から現代にいたる 20 世紀の日本の「知のパイオニア」にスポットをあてて、それぞれの分野で全シリーズ 12 冊を通せば、時代背景がみえてくるというのです。今西、岡倉らのほかに、田中久重（技術）、留岡幸助（自立支援）、荻野吟子（ジェンダー平等）と、これまで 8 冊が刊行され、来年さらに 4 冊が予定されていま

す。

＜編集人＞　帯では「一人称の伝記」とされています。これも、あまり見かけないスタイルだと思います。このスタイルは、斎藤さんの考えで採用されたものでしょうか、それともこのシリーズではこのスタイルで書くと決まっていたものでしょうか。いずれにしても、どういう意図でこのスタイルを選ばれたのでしょうか。

＜斎藤＞　「被伝者本人の視点」で子どもの読者に「自分のイメージ」を直接伝えることがねらいということで、「一人称の伝記」が最初から求められました。自伝ではないけれども、本人になりかわって語ってくださいという依頼でした。

　とともに、「この人のどういうところがパイオニアなのか」を明確にすることが求められました。具体的に「こうこうこうだから、日本の知を切り拓いたパイオニアなのだ」と、ずばりと最初に言ってくださいと。

　じつは、当初の依頼タイトル（仮題）は、「今西錦司と進化論」でした。編集者はユニークな「今西進化論」をイメージしていたのでしょう。でも、わたしにとっての今西さんは、山登りを生涯通じて続けてきた登山家であり、子どものころの昆虫採集をはじめ、ずっと自然を探求してきた研究者なのです。それで、山登りも含めて、自然にとりくんでこられたという意味で、「今西錦司と自然」としました。

＜編集人＞　「一人称の伝記」という、普通とは違った書きかたですから、執筆時にはご苦労もあったのではないかと思います。差し支えなければお聞かせください。

＜斎藤＞　たいへん、むつかしかったです。はじめはなかなか筆が進みませんでした。なんとか描けるようになっても、今西さんが晩年に中高年を相手に語っているようでした。それで、全面的に書き直しました。子どもにとって、身近に親しみをもって今西さんが感じられるようにと、苦心しました。まあ、コロナのおかげで、たっぷりと執筆時間がありましたから。

＜編集人＞　斎藤さんは、これまでに今西錦司さんについては多くの著作があります。それらはいわば大人向けですが、この本は小学校高学年から中学校むけとされています。特に工夫されたところや、新たに取り入れた内容などがあればお聞かせください。

＜斎藤＞　なにをどう表現すれば、今西さんの本質を、何も知らないまっさらな子どもの読者に伝えられるのか。つねにかんがえながら、書きました。幼少年期のころや学生時代は、なんとか詳しく触れられましたが、研究者の道に進んでいってからは、業績や個々の活動、研究仲間や学術探検とその協力者との関係、当時の大学や世間一般の事情などは、子どもとっては事実の羅列のようになってしまうので、かなり省略しました。

　それでも、「すみわけ」についてはかなり説明できたとおもいます。いっぽう、「今西進化論」もかなり書いたのですが、子どもにはむつかしいとおもって、最終的にほとんどカットしました。

　今回、新たに取り入れたのは、今西さんが日本国内で登った山を 1550 山としたことです。『今西錦司全集』や私のこれまでの著作では 1552 山でしたが、それを修正しました。これについては、改めて Newsletter で触れたいとおもいます。

＜編集人＞　今西錦司の生き方で、斎藤さんが一番惹かれるところはどんなことでしょうか。あるいは、読者に伝えたい「今西錦司像」はどのようなものでしょうか。

＜斎藤＞　学生時代から謦咳にふれることができ、晩年まで身近に接しさせていただきました。ありがたいことです。

　私にとって、若いころから、今西さんという高い山が存在していたことは、幸せだったとしみじみとおもうのです。

　この本では、入院されて最後にことばを交わした場面から描写をはじめ、その生涯をたどり、亡くなって鴨川べりでの野辺送りで結びました。

　自らの信ずることを行い、おのれ一途に生きられた、みごとな人生でした。

　今西さんのような学者は、日本には今後もう

現れないでしょうが、この本を読んだ少年・少女たちに、こんな学者もいたんだと知ってくれたら、うれしいです。

＜編集人＞　おかげさまで、本書の特色と魅力が伝わると思います。本書によって自然に親しみ、自然を大事にし、山に登る若者が増えることを期待しています。どうもありがとうございました。

本書の目次

今西錦司とわたし
はじめに
1　昆虫少年　6歳～13歳のころ
2　山を見つける　13歳～18歳のころ
3　登山に熱中　19歳～22歳のころ
4　山も学問も　22歳～30歳のころ
5　「すみわけ」発見　31歳のころ
6　登山から探検へ　32歳～45歳のころ
7　サルとともに　45歳～50歳のころ
8　ヒマラヤへの夢をかなえる　50歳～55歳のころ
9　アフリカで人類の起源をさぐる　56歳～66歳のころ
10　登った1500山と自然学　晩年のころ
おわりに
今西錦司略年表

第54回雲南懇話会（京都フォーラム）講演概要（その3）

山岸久雄

2021年12月18日（土）、京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホールで第54回雲南懇話会が開催されました。今回は講演概要（その3）として、特別講演一件の概要を紹介します。

雲南懇話会を、そのルーツである京都で開催するにあたり、われわれは遠方から京都へ来ていただく参加者の皆様に、京都ならではの講演を聴いていただきたいと願い、下記の特別講演を企画しました。特別講演のパワーポイント資料は雲南懇話会のホームページ　https://www.yunnan-k.jp/yunnan-k/　に掲載されていますので、併せてご覧ください。

特別講演「千日回峰行を生きる」
光永圓道（比叡山延暦寺一山大乗院住職、北嶺大行満大阿闍梨）

光永圓道師は本講演当時、46歳。12年前、34歳の若さで千日回峰行を達成され、4年前まで比叡山延暦寺で輪番として次の行者育成に従事し、現在は山麓の滋賀県大津市にお住まいである。講演では、まず千日回峰行について解説された。比叡山では伝教大師による開山以来、様々な修行が行われ、継承されてきた。このことは比叡山が世界文化遺産に登録された大きな理由となっている。これらの修行の中で、特に困難なものを三大地獄と呼ぶ。それは、①掃除地獄（西塔の浄土院に十二年間籠り、侍真－伝教大師に仕える－の修行をする）、②看経地獄（横川の元山大師堂で日に7回の勤行を続ける。勤行の際の鐘の音から「谷の鈴虫」と譬えられる）、③回峰地獄（東塔の無動寺谷を拠点とし、比叡山の峰々を回る修行。白い浄衣の行者が峰々の間を駆け巡ることから「峰の白鷺」と譬えられる）の3つである。

回峰行は相応和尚（831～919年、慈覚大師円仁の弟子）が毎日、根本中堂に供華をされたのが起源とされる。現在の回峰行は百日回峰行と千日回峰行があり、後者は百日回峰行を7年間かけて10回繰り返し、満行に至るもので、達成者は戦後13名に及ぶ。回峰行は比叡山内の三塔、及び山下の日吉大社を巡拝する「七里半」の行程を巡ると言われているが、実際の距離は五里（20km）余りである。これは、仏教では縁起の良い数字「八」の少し手前の「七と半分」との意味で、「七里半」と呼称したものである。

回峰行の意図するところは但行礼拝（たんぎょうらいはい）である。260ヶ所余りを巡拝するという修行形態をとるが、「歩く」ことは手段であって、目的ではない。歩行しながら禅をする（上半身は座禅、下半身は歩き）という境地が求められることから、別名「歩行禅」ともいわれる。そのためには「身口意」の三業（身：身嗜みを整える、口：真言を唱える、意：心に

光永圓道大阿闍梨を囲んでの記念写真（京大時計台国際交流ホールにて）

仏を念じる）が必要である。回峰行者の姿は死装束と言われ、浄衣（じょうえ、白い衣）、手甲・脚絆、四手紐（自害するため）・手巾、八葉の草鞋（わらじ）、未敷蓮華（みふれんげ）の御笠には六文銭（三途の川の渡し賃）が取付けられている。その姿は「行の中断は死を意味するとの覚悟」を示すものである。

光永師の千日回峰行を振り返ると、最初の百日行を1999年の3月末から7月上旬に行った。2000年には比叡山延暦寺の住職になり、3年間比叡山で勤務をした後、2003年から2007年まで、毎年3月末から7月上旬に百日行を行った。この間、第三百日満行後、蓮華笠を頭に頂戴し、足袋を履くことが許され、第五百日満行後、杖を持つことが許された。2007年7月から7回目の百日行が始まり、第七百日満行後、生き葬式（斉食儀）を経て、10月13日から「堂入り」に入業した。

「堂入り」は九日間にわたり明王堂に参籠し、この間、断食・断水・不眠・不臥を続ける。不動明王への勤行を毎日3回行い、ご真言を十万遍唱え、午前2時には不動明王にお供えする水（閼伽水）を汲むため出堂する。この修行はお釈迦様が、菩提樹の下で座禅と瞑想の中で悟りをひらく行を追体験するもので、光永師は体重が12kg落ちたそうである。堂入り後は、体を元に戻すのに約1ヶ月がかけられた。

2008年には8回目の百日行に入った。これまでは、自己のための修行（自利行）であったが、以後、衆生を救済するための修行（化他行：けたぎょう）となり、赤山禅院の往復が加わり、十五里（約40km）の行程となった。光永師はこの修行中、足に大きな怪我をしてしまったが、治療を続けながら行を続行した。2009年は満行に到達する年であり、まず3月末から7月上旬まで、9回目の百日行が始まった。行程は京都大廻りの二十一里（約60km）となる。第九百日満行後は、当初の七里半の行程に戻り、9月18日に975日をもって千日満行となった。千日まで25日が残されているが、この25日は、生涯にわたって修行する（行不退）ために充てられる。千日回峰行達成後、光永師は回峰行の本拠地である無動寺谷明王堂に輪番として、9年間にわたり後進の指導にあたられた。

光永師によれば、回峰行は比叡山が長年培い、整備された修行環境の中で、そのできあがったシステムに乗って行うもので、自らの独自なものを付け加えるものではない。光永師にとって千日回峰行はチャレンジではなく、やり遂げることができるものと確信していた。しかし、回峰行の途中で足に、生死にかかわるような大怪我をしてしまった。これは失敗であったが、失敗自体は悪いものではない。大切なのは、同じ失敗を二度繰り返さないことである。仏の顔は三度までとよく言われるが、本当は二度までである。

講演後、以下のような質疑応答が交わされた。

質問1：京都大廻りの時期は百日間にわたり、毎日フルマラソンとハーフマラソンを行い続けるようなもの。こんなことが人間に可能なのか？

答え：可能である。百日回峰行を繰り返す中で、距離も段階的に伸ばしてゆき、体を徐々にそのように適応させていった結果、可能となるもの

である。
質問 2：千日行を始めるにあたってのお覚悟は？
答え：私は東京生まれの千葉育ち。生まれつき病弱で、学校に半分くらいしか登校できなかった。体をなんとか健康にしたいため、15 歳で比叡山に入った。20 歳まで生きられないと思っていたが、高校を卒業する頃は人並以上に体力がついた。回峰行は、健康な体にしていただいた比叡山に対してお礼を申し上げるために入行したものである。
質問 3:千日回峰行に入るための資格、条件は？
答え：千日回峰行を出願するには、延暦寺住職であることが必要。延暦寺住職になるには、まず大学卒業資格が必要。さらに比叡山での本山交衆（ほんざんきょうしゅう）を 3 年間行い、「山の慣習」を学ぶ必要がある。

そのようにして延暦寺住職を拝命した後、千日回峰行を出願した。出願しても、必ずしも認められるものではない。私は 27 歳で出願したが、まだ若過ぎるとの意見があったが、伝統を伝える修行者として、最終的には幸いにも、認めてもらうことができた。

講演の中で、私が特に感銘をうけたのは、千年以上かけて磨き上げてきた比叡山の修行方法の偉大さであった。この修行方法に沿って肉体が訓練されてゆくと、質問 1 にあるような超人的な行動が可能になるのであろう。その修行方法には生理学的な合理性もあるのではないか。また、修行の中で肉体を限界近くまで追い込むと、体の器官、生理が活性化すると思う。その状態になって初めて到達できる境地があるのではないか。そのような境地を体験し、たいへん困難な修行を成し遂げた大阿闍梨を人々は尊敬し、帰依してきたのであろう。講演終了後、光永師を囲んで集合写真を撮らせていただき、この日のよき記念となった。

会員動向

会員異動

高尾文雄　勤務先変更
中川　潔　自宅住所変更
村上正康　自宅住所変更
山本克彦　勤務先削除

事務局だより

2022 年 11 月 3 日、梅里雪山三十三回忌の法要が、紅葉の美しい秋晴れの比叡山延暦寺元三大師堂ならびに鎮嶺碑前にて執り行われました。ご家族、AACK、山岳部、探検部関係者約 50 名の参加のもと、日中 17 名の帰らぬ隊員のご冥福をお祈りいたしました。

2022 年 9 月より、AACK ホームページの管理と更新作業も本 Newsletter の編集配送作業と同様、土倉事務所伊藤貴子さんにお手伝いいただくことになりました。それに合わせて、ホームページのレイアウトもほんの少し変更いたしました。http://www.aack.info/index-ja.html にアクセスをお願いします。

編集後記

カンペンチン 40 周年（その 2）を掲載しました。隊員皆さんの 40 年、中国の、日本の、AACK の、そして自分の 40 年。時間の重みを感じます。今西錦司さんが亡くなられて 30 年、ユニークな伝記が出版されました。一方で、時間を超越しておられるであろう方のお話もあります。

未来に目を向けたいところですが、雪国住民としては直近の未来、この冬の雪ばかりが気になっています。皆様どうぞよい新年をお迎えください。　横山宏太郎

次号原稿締め切り　2023 年 1 月 16 日
原稿送り先：横山宏太郎

発行日　2022 年 12 月 20 日
発行者　京都大学学士山岳会　会長　幸島司郎
発行所　〒 606-8501
京都市左京区吉田本町（総合研究 2 号館 4 階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科　竹田晋也　気付
編集人　横山宏太郎
製　作　京都市北区小山西花池町 1-8
㈱土倉事務所